

建学の精神の歴史的過程と位置づけを振り返る

The reflection on the historical processes and positioning on the “Founding Spirit”

高木 総平

Sohei TAKAKI

(中部学院大学教授、松山東雲女子大学元教授)

松山東雲女子大学創立 30 周年に当たり、初めにその「原点」に触れ、そして筆者が在任した 12 年間のキリスト教教育の一端を振り返ることで、その建学の精神のあり方を確認したい。筆者は、松山東雲中学・高校に 10 年間（内 6 年間は宗教主事）勤めた後、1998 年新設の女子大学人間心理学科所属として学内異動をした。その後心理子ども学科に改組されるまで、大学の宗教主事を 10 年務めた。その間、本学の原点である創立者二宮邦次郎の歩みについて、彼が生まれ育った備中松山、明治以後は備中高梁の歴史、その精神性について、日本基督教団高梁教会牧師八木橋康広とともに 3 回にわたり本学紀要に投稿した¹⁾。

そこからまず創立者二宮邦次郎に関して簡単にまとめてみる。二宮は『松山東雲学園百年史 通史編』²⁾によると備中高梁における自由民権運動の指導者のひとりであった。その自由民権運動の目標は、当時の薩長藩閥の権力独占という理不尽に抗議し、国民の間に自由な言論を起こし、その運動の中から国民の代表を選挙で選んで、その代表者の集まりである国会を開設して、国会での話し合いで憲法や国の政治のあり方を決める³⁾というものであった。それとともに、二宮は、博物学を学ぶに及んで、「宇宙間には造物主が存在しないはずがない、この造物主こそ天地の主宰者、唯一の神である」という信念を強くするに至った⁴⁾のである。これは聖書の説く神であり、目に見えない自由や真理であり、見える自由や真理⁵⁾を追究していた自由民権運動とともに、その根底には「至誠惻怛」（しせいそくだつ）があった⁶⁾のである。

その二宮の人生を決定づける出来事が生じた。それは 1880 年（明治 13 年）2 月 17 日から 4 日間この地を訪れた新島襄の伝道であった。この伝道説教を要約したもの⁷⁾を紹介する。「人は天地万物と人間を創造した神の意志を知り、恐れ敬い、それに従うことによってはじめて、金や権力・名誉などこの世の力の奴隷になることから解放されて真理と自由を得て、しかもその自由を自分のわがままのためではなく他人や世の中のために使い、それに生き甲斐を感じるようになることが出来る。そういった神への信仰を持つことによって自由と真理と愛に満たされた市民が人を育てる教育に携わることによって、はじめて国は本当の意味で強くなり豊かになり、より高いレベルの状態、すなわち文明開化が出来る。とりわけ、日本においては、一刻も早く女性にそのような教育が

施されなければならない。なぜなら封建時代には女性が男性と同じ教育を受けて、一人の人間として自分の良心と責任に従って自立するなどという考え自体がなく、女性は一生の間『家』に従属した奴隷のように考えられていたからだ。それは文明開化の明治になってもほとんど変わらない。このような『奴隷のように自主性のない女性』ばかりが将来の日本人を生み育てるとしたならば、それは日本の文明化に大きな障害となってしまふ。しかし、政府は様々な理由から女子教育には本腰を入れようとはしない。そこでキリスト教の信仰を基とする女子の教育、とりわけ、政府には本気でやる気もそのノウハウもない女子の中等以上の教育を立ち上げることが日本のキリスト者の急務である。」これに感激した二宮は、小学校教師も政治家になる希望も投げ捨て、牧師そしてキリスト教信仰に基づく教育者になることを決意し、一途にその決意を守り続けたのであった⁸⁾。

この新島との出会い、二宮の決意が本学の原点である。ここから先達たちの幾多の苦労の後、五訓⁹⁾として「高遠なる理想」「敬虔なる信仰」「真摯なる努力」「清純なる愛情」「私心なき奉仕」にまとめられ、中学・高校で継承されている。そして中学・高校、短期大学、大学では、「信仰・希望・愛」(新約聖書 コリントの信徒への手紙一 13章)がスクールモットーであり、それは三つ葉のクローバーの校章、学章としてシンボル化されている。

キリスト教主義大学において重要、不可欠なのはこの「建学の精神」をどう具現化するかということである。ここで、筆者が在職した1998年から2011年の12年間の内10年間の『寒梅』¹⁰⁾における主張の要点を確認することにより、当時キリスト教教育の責任を負っている当時の大学学長、短大学長、中学・高校校長、各宗教主事¹¹⁾がどのような思いを持っていたかを確認し、その具現化を考える契機としたい。

上記の執筆者延べ43人の投稿から以下のようなテーマでまとめた。当然複数のテーマで語られたことも多く、一つの投稿に2～3のテーマがある場合もある。厳密に区分けできない場合もあるが、あえて以下のように分類し、その回数も記す。①建学の精神 15 ②神、キリスト 10 ③多文化共生、異文化理解 8 ④キリスト教教育 7 ⑤平和 5 ⑥ボランティア(被災地支援) 3 ⑦カルト問題 3 ⑧一人一人が大切な存在 2 ⑨環境問題 2 ⑩愛、献身 2 ⑪教会 2 ⑫この社会への疑問 2 ⑬救い、弱さ貧しさ、ジェンダー論、死、人生 各1回 このようにまとめてみて気づいたことがある。私が記憶する限り、チャペルにおいてもほぼこのようなテーマで、奨励がなされていたのである。このような項目に表れている課題にどう取り組んでいくか、それが建学の精神の具現化の方向である。普段学内においても平和、人権、国際理解、女性の自立ということが絶えず意識され、それらを根底に様々な活動がなされていたのである。現在もそれは継承されていると推察する。そういう意味において、建学の精神の具現化の動きは継承されてきたと考えられるが、学生の魂まではそのメッセージが届いていない¹²⁾との指摘は重い。それをどう発信しているか、今も問われている。新島が嘆いた¹³⁾ 現実、金や物のとりこになっている現実は今も変わらない。そこに綻びも生じているが、物の豊かさを求める合理性ゆえに人が大切にされない社会のあり方はますますひどくなり、その隙間にカルト団体が入り込んでいる。そしてコロナ禍でより明確になった

のが、同調圧力に抗しえない自立できていない日本人の姿である。そのような社会のしわ寄せは女性をはじめ子どもたち等に及び、女性が不利になる制度や習慣はまだまだ続いている。

そのような現代において、一人一人が神の前に尊重され、謙虚でしかも自立した人間として、この社会や世界の問題と向き合える学生を育てる責務があり、それは社会から今後より期待されていくと思われる。それが本学がキリスト教主義の女子大学として存在する意義である。

注

- 1) 高木総平・八木橋康広『二宮邦次郎の故郷・備中松山の精神的環境』
-新島襄書簡から読み解く備中松山の幕末維新- (2005) 松山東雲女子大学紀要第13巻
高木総平・八木橋康広『二宮邦次郎の故郷・備中松山の精神的環境 2』
-備中松山の栄光- (2006) 松山東雲女子大学紀要第14巻
高木総平・八木橋康広『二宮邦次郎の故郷・備中松山の精神的環境 3』
-邦次郎回心への道のり- (2010) 松山東雲女子大学紀要第18巻
- 2) 松山東雲学園百年史編纂委員会編『松山東雲学園百年史 通史編』(1994) 35p
- 3) 前掲書『二宮邦次郎の故郷・備中松山の精神的環境 3』49p
- 4) 前掲書『松山東雲学園百年史 通史編』35p
- 5) 前掲書『二宮邦次郎の故郷・備中松山の精神的環境 3』50p
- 6) 天に対して誠意を尽くし、隣人に対しては慈愛の精神をもって接する。江戸末期から培われてきた松山藩における陽明学に基づいた高い精神性がその背景にある。
- 7) 現代語で読む新島襄編集委員会編『現代語で読む新島襄』(2000) 149p-150p
- 8) 前掲書『松山東雲学園百年史 通史編』35p-36p
- 9) 前掲書『松山東雲学園百年史 通史編』543p-544p
五訓は戦時下1943年にまとめられたもので、当時は「敬虔なる信念」「真剣なる努力」であったが、戦後今のように書き改められ、建学の精神の実践に資することになった。
- 10) 23号2001年から32号2010年までに目を通し確認した。ただし24号のみが欠落している。
- 11) 本稿は大学のものであるが、建学の精神は創立以来継承されてきた、学園全体に関わるものである。ここでは短期大学、中学・高校の関係者も含めている。
- 12) 山崎正幸「実を結ぶために」『寒梅』26号(2004)
- 13) 同志社編『新島襄書簡集』(1954) 131p-132p
明治を迎え「身分社会」から「自由」になったにもかかわらず、備中高梁という地方においても遊郭のけばけばしい灯を目の当たりにして、貪欲とエゴイズムにとらわれている人々の姿を嘆いた。